

「字説」小論

中川徳之助

江戸時代以前の五山禪僧の作品から、「梅」の文字を有する字説を求めて、今、十七篇を得た。(排列は、時代順に従わない。)

字説

筆者

所授者名

所取作品

1 梅莊 説	季弘大叔	永林	鹿庵遺稿
2 梅莊字説	蘭坡景臣	巖	雪機獨唱集
3 梅莊字説	景徐周麟	等靖	翰林葫蘆集
4 梅龍字説	同右	登	同右
5 梅浦 説	萬里集九	楞伏	梅花無盡蔵
6 梅霖字説	月舟壽桂	龍	幻雲文集
7 梅初字説	常庵韻崇	最	角虎道人文集
8 梅仙 説	東沼周巖	壽	流水集
9 梅仙字説	横川景三	真	京華別集
10 梅叔字説	同右	法霖	同右
11 梅岑字説	同右	常	京華後集
12 梅雲字説	同右	意	京華集
13 梅巖字説	同右	吞	同右
14 梅巖 説	仁如集堯	承村	鏡氷集
15 梅心字説	同右	同右	同右

16 大梅字説	——	惟肖得蹠	——	東海瓊華集
17 惟梅字説	彦韻周興	——	——	半陶稿
道号類などから、次の四篇を併せ考えた。				
18 梅嶺字頌	横川景三	觀	——	京華新集
19 古梅	景徐周麟	龍	——	翰林葫蘆集
20 梅溪	同右	遜	同右	同右
21 梅坡字序	同右	昊	同右	同右

二十一篇の数では立言も憚られるが、この類の字説は室町時代後半に多いようである。

本稿では、紙数の関係上、比較的短い梅霖字説を例示し、それを中心に、他の諸篇に触れつつ、字説について考え、当時の五山禪僧の観念世界の一端をうかがいたいと思う。「梅」の文字を有する字説をことさらに取り上げたのも、「梅」の背後にある、禪僧達の観念のひろがりを目したからである。

梅霖字説

惠峰龍公僧章。出于龍淵門下。為一龍雛。有客霑予華其称。予曰。游者吾知其為魚。飛者吾知其為鳥。走者吾知其為牛。為馬。為羊。為鹿。為。龍之為靈過於麟鳳。或潜或飛。或小或大。雖云惟皇不可知

焉。何字副龍以表厥德。客曰。翁論甚高。庶幾早之。古今儒釋龍其諱者班班有焉。誰能不字焉哉。於是予不克固辭。稱為梅霖。客曰。梅霖之義。梅與霖乎。梅之霖乎。四五月間。有迎梅送梅之雨。有入梅出梅之雨。此則以梅之冥然而有雨也。劉郎驟雨酒梅之句。蘇子細雨梅花之句。此則以梅之花開而有雨也。翁之命意在花耶在冥耶。抑亦命龍為梅霖。義在梅耶在霖耶。昔嘗稽梅子真宿隱之地。有大梅樹。伐為禹廟之梁。張僧繇畫龍于梁上。風雨之夜。飛入鏡湖與龍相鬪。後人見梁上。水痕淋漓。泮藻尚滿。然則梅之化龍也。且梅之老而屈蟠滲水之間喚為梅龍。不亦梅之似龍哉。以梅副龍。恐在茲乎。凡龍之變化唯在雨爾。儘不得雨其威難奮。副龍以霖。亦在茲乎。梅霖云。孰是為立。予曰。子解梅霖何其隘哉。梅也屬龍霖也屬龍。梅與霖也得。梅之霖也得。有花有冥。二美相并。雖然予於公所期不翹焉。書說命曰。若作和羹。爾惟鹽梅。又曰。若歲大旱。用汝作霖雨。蓋殷高宗夢得說於傅巖。立之作相。仁氣養民。恩澤被物。自爾世用鹽梅霖雨為相門口史矣。吾公異日座妙雲閣上激龍淵一滴。天旱以濟矣。人旱以蘇焉。加之克調法味止群生渴。則人咸謂為染衣相。染衣相在德不在位。欽哉。

某の僧について、その称を誣にし、その徳を表するものとして「字」あざな「字」が求められ、その「字」の意味するところを解明して、僧の向上事に資し、その遠大を期する意を籠めて記されるのが「字説」であろう。禪林象器箋称呼門に、法名・道号・別号・表徳号の項がある。次に、その要を抄する。

〔法名〕忠曰。凡名加祖字宗字者祖之宗之之意也。祖宗者尊崇之也。其所尊崇者下某字是也。而今人不詳此義。浪加祖宗字。非也。〔道号〕忠曰。以號表所得之道也。即是表徳號。今時以字為道號。

而道號之外有表徳焉。(中略)古今印史云。道號之称。雖起於末世然義各有取。或因性急而以韋目勉。或因性緩而以鼓自厲。有思親而號單雲。有隱江湖而號散人。紛然不同。然皆士流則有之。今也不然。而胥吏之徒往往而有。以號者衆也。恒慮其相同。崇尚新奇。有名木者號曰半林。有姓管名齋者號曰四竹。穿鑿亦甚矣。於義何居。〔別号〕又言別称即表徳也。(中略)楊升庵外集云。幼名。冠字。長而伯仲。沒則称諡。古之道也。未聞有所謂別號也。

〔表徳号〕忠曰。禪祖昔但有名而已。臨濟之義玄徳山之宣鑿之類也。後世便有道號謂字也。後又道號外有表徳號。其其道號即表徳耳。

後來の無着道忠が歎くところ、すでに室町時代の禪林に見られる。梅霖字説のごとく、僧童に字を与え、字説を与えるのも、その現われである。しかし、横川は字説を求められて、「男子二十。冠而字。」の礼記の語を挙げ「未及志學而欲以字行邪。」と叱し、後年あらためて梅雲子説を記し与えている。景徐は「方今叢林之士。歲未到二十。而以字行者。或称院號者。滔々是矣。」(桃隱道号)と歎じ警めている。一概には言いがたいが、字説が、本来の宗教的意義を薄くし、文学的関心を濃くしつつ求められている風潮は指摘し得る。

さて、梅霖字説であるが、ここに言う龍公僧童は、後に東福寺塔頭大機軒を興した梅霖守龍であろう。この字説は、「字」の有する意味を、客が摸索し主が闡明していく問答形式で叙せられていて、字説の理解がどのような形で為されたかを教えてくれる。以下、その主客の問答を通じて話柄となっていることを、順を逐って取り出し、同一話柄について述べる他の字説の文を併記し、かつ、その話柄の所掲、また参考事項(この場合、数字記号でその関連を示す)を下欄に抄出する。

話柄Ⅰ 梅の花・実

梅花を重んずるか、梅実を重んずるか、花・実の二を挙げて梅を論ずる文は多い。花・実の問題は、文学上・宗教上、好箇の論題となる。中国の詩文にも広く見られ、とくに所拠とすべきものを指摘し得ない。

① (梅霖字説) 四五月間。有迎梅送梅之雨。有入梅出梅之雨。此則以梅之實熟而有雨也。劉郎輕雨酒梅之句。蘇子細雨梅花之句。此則以梅之花開而有雨也。翁之命意在花耶在実耶。

(梅雲字説) 巳而四月五月。迎雨送雨。青者漸黃。生者漸熟。登於廊廡之上用於輿傳之中。一味五味十酸百酸。傳曰。天子置公卿大夫。鑿梅相仍。不可獨是獨非也。而今日之佳実乃前日之花也。在人論之。學與道二也。少壯幾時。所勤者業。屢則寸陰分陰。夜則短髮長髮。騰芳書林。飛英藝苑。所謂梅之開花於始也。年已長矣。識已高矣。詩熟文熟禪教共熟。則黑衣宰相峙宗鼎以調以和。使盡大地人染其指。既其口也。所謂梅之結実於終也。嗟乎。叢社一變。賸繡林立。無花無実。有何面目見梅哉。

① 入埤雅∨今江湖二浙。四五月之間。梅欲黃落。則水潤土溽。礎壁皆汗。蒸鬱成雨。其霏如霧。謂之梅雨。沾衣服皆敗黶。故自江以南。三月雨謂之迎梅。五月雨謂之送梅。
△風土記・古今圖書集成による∨夏至霖霽至前為黃梅。先時為迎梅雨。及時為梅雨。後時為送梅雨。「梅叔字説」に「又兩三日以往為霖。三月迎梅。五月送梅。梅之生已熟者。青已黃者。以雨之為霖也。」とあり。

(同)言未既。有客難曰。夫占蘭雖香無実焉。茶蘼雖白又無実焉。梅之能白能香而異於蘭與茶蘼以有実也。故詩之召南書之說命。皆論其実。由梁何遜到唐宋元明而詞人才子鳴之詩賦。但論其花為可惜矣。蓋斯論也楊萬里云趙松雪處邵庵亦云。今也舍彼取此果如何也。
(梅初字説) 所期自今而後。飛芳聲如梅之猛驪滿天地。騰茂実如梅之櫻花待霖雨。則孰不謂之法王王佐也哉。
④ (梅莊字説・蘭坡) 蓋牡丹花之絶而無果。荔支果之絶而無花。獨梅不然。在花則為栴。在実則為瓠。其名求也暨於炎帝之經着於說命之書召南之詩。皆以実而不以花。迨乎楚襄王獵雲夢之野看梅之始花。命駢乘宋玉移之於後宮。是有遇也。然後却月之靄凌風之霧。雪後園林水邊離落。或詩之或賦之。至気条之如薔薇餘

占上春時 也知造物含深意 故與施朱發妙姿 細雨冥殘千顛淚 輕寒瘦損一分肌 不應便雜天桃杏 半點微酸已著枝」(紅梅)のごとき詩を言うか。また再和楊公濟梅花十絶に見る「湖面粉麝片片飛 樽前吹折最繁枝 何人会得春風意 怕見梅黃雨細時」の詩、聯珠詩格に第四句を「怕見長江細雨時」につくる。あるいはこの詩を言うか。
③ 入詩經・召南∨にみる標有梅の詩、「標有梅 其实七兮 求我庶士 迨其吉兮」など。書之說命にについては後掲。
④ 入蘇測集∨増修埤雅 荔子無好花 牡丹無実実トアルソ。入埤雅・釋木・梅∨荔枝無好華 牡丹無実実。見桃録・梅江号にも、嗚呼道実不道花。說命闕文乎。不道実不道花。楚辭遺恨耳。牡丹無実。荔子非花。豈同日語乎。」と見える。
⑤ 入楊萬里・和梅詩序∨梅暨於炎帝之經着於說命之書召南之詩。然以滋不以象。以実不以華也。入玉兔・梅華伝∨先生姓名梅華字魁。不知何許人。或謂出炎帝。炎帝之經とは神農本

醜亦畫以為圖。是皆愛花之至也。顧夫古之人豈不知有花耶。唯以適用尚之矣。故道實而不及花。

(梅跋說) 毛曰。夫梅也者出于炎帝之經記于書詠于詩。皆謂其佳矣也。自陰鏗何遜賞花以降。著翰墨者不知幾千萬也。

(梅浦說) 夫有花者必有實。有實者必有花也。花與之芬芳無超梅之者。豈不天地之英物乎哉。

(梅叔字說) 按寂照師題十賢詠梅詩圖曰。詩之召南書之說命。孔子所刪定也。皆言其實而不及花。十君子者讀召南詠說命。習孔子之業者。皆言其花而不及實。世道不古例皆如是。事載於雜錄。而可考也。吾七朝帝師夢窓正覺榜其塔曰黃梅。乃父玉潤文淵老人又扁其室曰大梅。皆言其實而不及花。豈偶然哉。

(惟梅字說) 雖然書之說命所

草經を言うか。

⑥ 八朱熹・梅花賦序∨楚襄王遊乎雲夢之野觀梅之始花者。愛之徘徊而不能舍焉。騷乘宋玉進曰。美則美矣。臣恨其生寂莫之濱而榮此歲寒之時也。大王誠有意好之。則何若移之瀆宮之面而終觀其美哉。

⑦ 八何遜・早梅詩∨冤園標物序 鷲時最是梅 衝雪當路發 映雪擬寒開 枝橫卻月觀 花繞凌風臺 朝灑長門泣 夕駐臨邛杯 應知早飄落 故逐上春來 「梅跋說」に「自陰鏗何遜賞花以降」とあるは、八楊萬里・和梅詩序∨「南北諸子如陰鏗何遜蘇子卿詩人之風流至此極矣。」にならうか。何遜については「梅溪頌」に「昔何仲言之在楊州也。吟詠八脉イ∨乎梅花下。千古風流也。」とある。

⑧ 八林和靖・梅花∨吟懷長恨負芳時 為見梅花輒入詩 雪後園林繞半樹 水邊離落忽橫枝 人憐紅艷多應俗 天與清香似有私 堪映胡雛亦風味 解將豎調角中吹 林和靖については、梅雲字說・梅跋說・梅莊字說(景徐)

謂爾惟與梅者是言其美也。今之所取諸花。則命意如何耳。蓋今日之孤芳乃明日之佳實也。侍史純人能イ∨保其花以到其美。則文章也道德也克始克終者在此矣。勉旃。

話柄Ⅰ 梅子真

(梅霖字說) 昔會稽梅子真舊隱之地。有大梅樹。伐為禹廟之梁。張僧繇畫龍于梁上。風雨之夜。飛入鏡湖與龍相鬪。後人見梁上。水痕淋漓。泮灑尚滿。然則梅之化龍也。

(大梅字說) 四明圖 八四明圖經・古今圖書集成による∨大梅山在鄞縣東七十里。蓋溪梅子真舊隱也。山頂在大東。蓋漢梅子真舊隱 梅木。其上則伐為會稽禹廟之梁。其下則為它也。山頂有大梅。伐為會稽禹廟之梁。至梁張僧繇畫龍其上。風雨。飛入鏡湖與龍鬪。後人見梁上。水痕淋漓。泮灑尚滿。始駭異之。乃以鐵索鎖於柱。八蘇東坡詩注∨前漢梅福字子真。元始中王莽專政。福一朝弃妻子去九江。人佞以為仙。其後有見福於會稽者。變姓名為吳市門卒云。

梅子真について横川景三は次の話を記す。

に見えるが、詩にあらわれるほどの影響を、字説には与えていない。 ⑨ 八范成大・梅譜∨其新接稗木一歲抽枝嫩。直上或三四尺如餘醴蓄薇叢者。其下謂之氣矣。此直宜取實現利。無所謂韻與格矣。(中略) 近世始畫墨梅。江西有楊補之者。尤有名。其徒倣之者實繁。觀楊氏畫大略皆氣象耳。

(梅岑字說) 按昌國志。寶陀在州之東海梅岑山。世伝梅福煉丹之處。經謂。東大洋海西紫竹旃檀林者便此地也。梁貞明中日本僧惠鑄遊五臺山而歸到此。舟不能動。遂創觀音院於梅岑之陰。事具于丘慈盛熙明補陀洛山記。

(梅仙字說) 漢梅子真時号梅仙。命字之義在此矣。而餘姚之大梅東海之梅岑。蓋梅福煉丹之處也。事具於梅岑說。此不重告矣。
(梅嶺字頌・京華新集) 東海宝陀山有院曰梅岑。觀音老人居焉。

横川が昔上人に与えた梅岑字頌の序にも「世伝補陀路伽山一名梅岑。余所命在此矣。」とある。横川に師事した彦龍も次の文を作る。
(梅岑字偈) 雜華会上。善財童參五三知識。到紫竹旃檀林海岸瑣絶處禮觀音大士。蓋梵曰補陀洛迦華曰小白花岩海上梅岑山是也。
梅嶺字說にあつては、僧の名の龍と字の梅、大梅字說にあつては、僧の名の梁と字の大梅とのかかわりから梅子真に言及しているにすぎぬ。横川景三や彦龍周興の、梅子真の受けとめ方は異なる。梅子真―梅岑山―觀音信仰という觀念のつながりが見られる。觀上人・觀少年・昔上人に与えられた梅嶺字說・梅岑字偈・梅岑字頌では、僧の名がこうした觀念のつながりを導き出す直接の契機となっているが、その契機にかかわらぬことは梅岑字說・梅仙字說に知られる。ただ、東沼の梅仙說を見ると、ひとしく梅仙の字について述

入補陀洛迦山伝昌國志曰。昌國州在東大海西(中略)寶陀寺。在州之東海梅岑山。世伝梅福煉丹之所。釋所言。東大洋海。西紫竹旃檀林者。是也。
(同) 日本僧惠鑄。從五臺山得菩薩像將還國。抵焦石舟不能動。望潮音洞蹻即得達岸。遇以像舍於洞側張氏家。屢觀神異。遂捨居作觀音院。
(同) 梁貞明二年日本僧惠鑄。首創觀音院。在梅岑山之陰。

べながらも梅子真に言及せず、「夫儂也者何也。蓋金僊氏之類乎。」と述べて、仙―金仙の連想を強くうち出している。梅子真―梅岑山―觀音信仰という觀念のつながりには、横川景三の觀念の殊相を顧慮すべきかもしれぬ。
なお、梅子真については梅子真―大梅山―大梅法常という觀念のつながりも見られる。

(梅岑字說) 大梅常曰。任汝非心非仏。我只管即心即仏。是予命意也。
(大梅字說) 昔常禪師已得記別。晦養于此久矣。馬師知時節已到云。梅子熟矣。繇此鼎鑪四發。天下仰想。地託人以頭。江西派下指為一方津梁。
(梅心字說) 昔太梅常禪師曰。訪任他。我這裡即心即仏。馬大師曰。梅子熟也。蓋梅心字出于此也。
(梅莊說) 大梅有謂。我只即心仏。簸箕翁發梅子熟矣之言。古今叢林以為口實也。
(梅嶺字說) 他時異日。伝衣庵中。聯祖芳者如嶺南之續黃梅。結道果者如江西之得大梅。則法門良窳宗鼎佳矣。非梅巖而其誰也耶。
(梅仙說) 何以言之。則昔者大梅之常茅舍而深隱。江西馬大師印可曰。大眾。梅子熟也云云。
入景德伝燈録▽明州大梅山法常禪師者襄陽人也。姓鄭氏。幼歲從師於荊州玉泉寺。初參大寂。問如何是仏。大寂云。即心是仏。師即大悟。唐貞元中居於天台山餘姚南七十里梅子真舊隱。(中略) 大寂聞師住山。乃令一僧到問云。和尚見馬師得箇什麼便住此山。師云。馬師向我道即心是仏。我便向遮裏住。僧云。馬師近日仏法又別。師云。作麼生別。僧云。近日又道非心非仏。師云。遮老漢惑亂人未有了日。任汝非心非仏。我只管即心即仏。其僧迴拳似馬祖。祖云。大眾。梅子熟也。自此學者漸臻。
入江湖風月集注▽大梅常頌云。強被世人知住處。又移茅舍

入(梅叔字説)抑右之黃梅五世而出大
梅常。今之黃梅四世五世而出大梅與
梅叔。其揆一也。頓則本來無物。漸
則時時拂拭。是梅叔之所以遠承於黃
梅也。他只非心非仏。我只即心即仏。
是梅叔之所以近嗣於大梅也。

話柄Ⅱ 梅龍

(梅霖字説)且梅之老而屈蟠
澗水之間。喚為梅龍。不亦梅
之似龍哉。

たとえば翰林五鳳集に見ても、「梅化龍耶龍化梅 根蟠枝屈雪中
開 三冬不屈水清淺 飛入曉堂雲一隈(題梅龍齋・琴叔)のごとく、
梅龍の詠は多い。梅龍の語は、臥龍に似た梅樹の形相に出ている
が、梅と龍との觀念のつながりを助けるものに易の思想がある。

(古梅) 蓋龍喻陽
氣。比之於梅之合一
陽於地底。是則潛龍
勿用也。發乾元一氣
於冰雪中。是則見龍
在田也。及乎桃李鶩
陽之時。為百花魁而
挺出乎萬木之上。是
則飛龍在天也。雖然
龍者動物也梅者植物
也。動植雖殊置之於

深居。深居字出于此。
入蠶測集√南頓北漸ノ宗ト云
ハ南六祖盧能本來無一物何處
惹塵埃ト云々ハ頓ノ機ソ。
北ハ神秀時時勤拭拭莫使惹塵
埃ト云ハ漸ノカタソ。

梅龍。好事者戲酒遊之。

①「以梅為太極」、後出の「枝上太極」とか
かわるか。△皇元風雅・陳野雲・梅花√暖透仁
根太極枝 枝南枝北景催詩 千林萬壑雪深廻
兩鬢三花春到時 皎々不知清作壘 稜々无
復瘦如斯 臙仙相對花應笑 總是三生姑射姿
翰林五鳳集に太極枝を詠じたる詩多し。「梅
花枝上」△皇元風雅・趙芝室・自遣√多病相
如尙愛文 心期老去共誰論 十年灯火客旣在
半世江湖書眼昏 竹葉盃中消日月 梅花枝上
識乾坤 何時去作青山隱 獨疏太玄深閉門
△錦繡段抄√又花ハ冬至一陽生スル時ニ開

方寸之地。則龍之為
梅乎。梅之為龍乎。
不可得而判焉。
(梅龍字説) 古人有
以梅為太極者。又有
謂梅花枝上識乾坤
者。(中略) 吁乾德
備乎梅矣。以龍為象。
龍陽物也。故曰。時
乘六龍以御天。是所
謂天上靈梅乎。
(梅莊字説・景徐)
予謂。易有先天有後
天。後天即點易洞中
滴露研朱者在焉。先
天即梅花在焉。深根
於四聖人未發之地。
而開花於六君子之
林。枝上太極。枝上乾
坤。一一可見矣。蓋
和靖之所伝。豈非梅
花易乎。
(梅莊字説・蘭坡)
然而託仁根於太極之
始。霞混沌一氣者莫

也。故ニ風雅集詩云竹葉杯中消日月 梅花枝
上識乾坤ト作ル也。△蕉窓夜話√梅花枝上識
乾坤 古句ソ。易乾卦新注ニ、梅未開ノ時ハ
元、開亨、実ノ始生ハ利、実ノ熟ハ貞也。粟
ニモ是ヲ云ソ。△朱文公易説・乾卦√梅藁。
初生為元。開花為亨。結子為利。成熟為貞。
△古今圖書集成・梅√程氏遺書。早梅冬至
已前。發方一陽未生。然則發生者何也。其榮
其枯。此萬物一個陰陽升降大節也。然逐枝自
有一個榮枯分限不齊。此各有一乾坤也。

②△周易圖説述√朱子晦庵曰。據邵氏説。先
天者伏羲所畫之易也。後天者文王所衍之易
也。△同√凡今易中所言皆是後天之易耳。以
此見得巽節先生後天之説。最為有功。△經義
考√楊慎曰。易圖先天始於希夷。後天續於康
節。

③仁根については①に陳野雲の詩を挙げた。
△朱子語録√「又曰。元者天之所以為仁之
大德也。」ともある。△夢巖祖隱・紅白梅√
乾坤清氣鍾何物 太極仁根託此花△同・題紅
白梅詩軸後√梅在草木也。鍾乾坤之清氣。衆
太極之仁根△天隱龍潭・梅雪齋詩序√梅乃太
極仁根也。雪乃乾坤清氣也。

④「無極而太極。則出于唐僧杜順華嚴法界
觀。」(太田錦城・九經談)のごとき見方あ

若花。指之為先天り。

易。如今所命則在後天華嚴而已。

（梅初字說）先天下春專天下清者其唯梅乎。抽大極枝於巖畫不彰之時。放成道花於漢線未添之日。

話柄Ⅳ 傳説

（梅霖字說）書說命曰。若作和羹。爾惟鹽梅。又曰。若歲大旱。用汝作霖雨。蓋殷高宗夢得說於傳巖。立之作相。仁氣養民。恩澤被物。自爾世用鹽梅霖雨為相門口矣矣。

（梅叔字說）原之曰。殷高宗夢得良弼。刻其形求於野。說築傳巖。立以為相。殷道大興。其為治也不在阿衡之下矣。有謂。若歲大旱。用汝作霖雨。又曰。若作和羹。爾惟鹽梅。蓋副霖以梅。義在茲哉。

（梅巖字說）昔高宗夢得良弼。物色求之。說築傳巖。奉以（為脫欺）困相矣。說命曰。若作和羹。爾惟鹽梅。大經世之難也。苟不得良弼則如羹之無鹽梅矣。殷道藉微。武帝初位。內而衆賢未寤中興之真。外而衆庶猶渴太平之治。說方斯時也。匹夫而

易。今所命則在後天華嚴而已。

（梅初字說）先天下春專天下清者其唯梅乎。抽大極枝於巖畫不彰之時。放成道花於漢線未添之日。

話柄Ⅳ 傳説

（梅霖字說）書說命曰。若作和羹。爾惟鹽梅。又曰。若歲大旱。用汝作霖雨。蓋殷高宗夢得說於傳巖。立之作相。仁氣養民。恩澤被物。自爾世用鹽梅霖雨為相門口矣矣。

（梅叔字說）原之曰。殷高宗夢得良弼。刻其形求於野。說築傳巖。立以為相。殷道大興。其為治也不在阿衡之下矣。有謂。若歲大旱。用汝作霖雨。又曰。若作和羹。爾惟鹽梅。蓋副霖以梅。義在茲哉。

（梅巖字說）昔高宗夢得良弼。物色求之。說築傳巖。奉以（為脫欺）困相矣。說命曰。若作和羹。爾惟鹽梅。大經世之難也。苟不得良弼則如羹之無鹽梅矣。殷道藉微。武帝初位。內而衆賢未寤中興之真。外而衆庶猶渴太平之治。說方斯時也。匹夫而

易。今所命則在後天華嚴而已。

（梅初字說）先天下春專天下清者其唯梅乎。抽大極枝於巖畫不彰之時。放成道花於漢線未添之日。

話柄Ⅳ 傳説

（梅霖字說）書說命曰。若作和羹。爾惟鹽梅。又曰。若歲大旱。用汝作霖雨。蓋殷高宗夢得說於傳巖。立之作相。仁氣養民。恩澤被物。自爾世用鹽梅霖雨為相門口矣矣。

（梅叔字說）原之曰。殷高宗夢得良弼。刻其形求於野。說築傳巖。立以為相。殷道大興。其為治也不在阿衡之下矣。有謂。若歲大旱。用汝作霖雨。又曰。若作和羹。爾惟鹽梅。蓋副霖以梅。義在茲哉。

（梅巖字說）昔高宗夢得良弼。物色求之。說築傳巖。奉以（為脫欺）困相矣。說命曰。若作和羹。爾惟鹽梅。大經世之難也。苟不得良弼則如羹之無鹽梅矣。殷道藉微。武帝初位。內而衆賢未寤中興之真。外而衆庶猶渴太平之治。說方斯時也。匹夫而

易。今所命則在後天華嚴而已。

（梅初字說）先天下春專天下清者其唯梅乎。抽大極枝於巖畫不彰之時。放成道花於漢線未添之日。

話柄Ⅳ 傳説

△性海靈見遺稿Ⅰ一卷華嚴易 梅花先瀟泚

△見桃錄・梅窓Ⅰ驪皇一翻華嚴易

△見桃錄・梅江号Ⅰ夫梅為之梅。占春於穠

易翻先△翰林五鳳集・春江Ⅰ既來擲卷傍花看

春早驪皇一畫先

△書經・說命上Ⅰ高宗夢得

說。使百工營求諸野。得諸傳

巖。作說命三篇。（中略）王

庸作書以誥曰。以台正于四

方。台恐德弗類。茲故弗言。

恭賦思道。夢帝喪于良弼。其

代子言。乃審厥象。俾以形旁

求于天下。說築傳巖之野。惟

肖。爰立作相。王置諸其左右。

命之曰。朝夕納誨。以輔台

德。若金。用汝作礪。若濟巨

川。用汝作舟楫。若歲大旱。

用汝作霖雨。啓乃心。沃朕心。

起於版築之間。峙四海鼎。調三璣云云

△同・說命下Ⅰ王曰。來汝

說。合小子。舊學于甘盤。既乃

起於版築之間。峙四海鼎。調三璣云云

△同・說命下Ⅰ王曰。來汝

說。合小子。舊學于甘盤。既乃

逐于荒野。入宅于河。自河徂

亳。既厥終罔顯。爾惟訓于朕志。

若作酒醴。爾惟麴蘖。若作和

羹。爾惟鹽梅。爾交修予。罔

予襄。云云

傳説の話が説かれるのは「法門良弼」（梅巖字説）「法王王佐」

（梅初字説）輔佐乎法王 調和於宗鼎」（古梅）を願う意に出る。

話柄Ⅳ 止渴

（梅霖字説）加之

克調法味止群生渴云

云。

（梅莊説）昔魏軍大

渴。詭告以前有梅林。

士卒望以蘇矣。三軍

鼓譟。得以勝勦敵焉。

教中曰。談説醋梅。

口中水出。皆誘人於

繆妄。而達于真正之

△世説新語Ⅰ魏武行役。失汲道。軍皆渴。乃

令曰。前有大梅林。饑子甘酸可以解渴。士卒

聞之。口皆出水。乘此得及前源。

△首楞嚴經・卷二Ⅰ阿難譬如有人。談説醋

梅。口中水出。思踏懸崖。足心酸淡。想陰當

知。亦復如是。阿難如是醋説。不從梅生。非

從口入。如是阿難若梅生者。梅合自談。何待

人説。若從口入自合口聞何須待耳。若獨耳聞

此水何不耳中而出。想踏懸崖。與説相類。是

故當知。想陰虛妄。本非因縁。非自然性。

此梅樹林。非望以可

止渴矣。

人人所養之地。幸見

此梅樹林。非望以可

止渴矣。

人人所養之地。幸見

此梅樹林。非望以可

止渴矣。

人人所養之地。幸見

此梅樹林。非望以可

止渴矣。

以上、梅霖字説を中心に、そこに提示される話柄について考えた。「梅」の文字を有する字説を通じて取り出される話柄の一斑であるが、全豹を示唆するところはある。月舟寿桂には、澤少年に与えた梅霖字銘がある。

梅霖字銘

澤公髯年越之秀也。予字之曰梅霖。梅霖之義見于銘。銘曰。梅之於世。愛之以花。花唯春耳。不如與佳。佳者熱矣。霖雨家家。和核咬破。玉本無瑕。傳殿良嗣。蔑以加焉。吾徒所祝。其在此耶。

梅莊字説の三篇、梅仙・梅殿字説の各二篇をそれぞれに読みくらべても同様であるが、そこに見られる話柄はほぼ共通であり、字説所授者の個性に即して、とくに話柄が使われられることは少ない。字説の持つ宗教性よりして当然のことかもしれないが、同時に、禪僧の観念の安定した相を示している。

わたくしは、「話柄」ということばを用いて考察をすすめて来た。「話柄」といえば、知識・教養にかかわるものと、軽く受けとめられそうであるが、果たしてそうだろうか。

梅霖字説で、「梅霖之義。梅與霖乎。梅之霖乎。」という客の問いを受けて、「子解梅霖何其隘哉。」と言い、「梅與霖也得。梅之霖也得。」と説いて意義の拡充を明らかにしていく点、字説の持つ宗教的意義が発揮されている。単なる話柄の開陳、知識の伝達という以上のものがある。蘭坡の梅莊字説が、僧の名の殿と莊の文字を合わせて雑蓮莊殿域を説き、景徐の梅莊字説が梅莊等靖の法系（華嚴派）をとって華嚴經華嚴海を説いているのは、一見、ことばの遊戯にすぎないようであるが、そこには蓮華蔵世界の観念があり、宗教者としての体感があったと思われる。このような観念とその体感のう

に把握されたものが、いわゆる「話柄」であったとすれば、「話柄」は単なる知識にとどまらず、禪僧達がその中に生きていた、観念世界の一つの露頭と考えられる。字説の場合、命字者と字説筆者とが別人であることも多く、与えられた「字」の意義を明らかに、「名」と「字」との観念連合を解きほぐす場合、「話柄」が文学的な関心に浮遊し、宗教の場から逸することもある。この点を考察することによって、禪僧の観念世界の、文学への傾斜を測ることもできよう。

— 広島大学助教授 —